



Title	小学校における英語教育 その理論的背景
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 28, pp.79-88; 1997
Issue Date	1997-03-21
URL	http://hdl.handle.net/10069/30323
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-19T19:33:08Z

小学校における英語教育

— その理論的背景 —

大 坪 喜 子

0. はじめに

1994年度（平成6年度）から1996年度（平成8年度）までの3年計画で、長崎県西彼杵郡多良見町立伊木力小学校は、文部省が指定する「小学校における外国語に関する研究開発校」を引き受け、英語教育に取り組んでいる。筆者は、当初から伊木力小学校教員との交流を持ち、必要に応じて、小学校における英語教育のありかた、特に、教材の問題、指導法、教師の役割等について意見の交換を行ってきた。また、伊木力小学校におけるその研究開発のための運営指導委員会座長としてたびたび授業参観の機会を与えられ、実際の授業を観察しながら具体的に意見を述べることもでき、比較的現場に近いところに身をおいて伊木力小学校における英語教育に関わってきた。一方、長崎大学教育学部英語科においても、大学院の学生が中心となって、1995年5月から、長崎市矢上地区子供会の希望者およそ20名を対象として毎週一回小学生のための英語教育の実践を行っている。大学院生たちは講義を通して得た知識を授業実践を通して確かなものに見受けられる。事実、3年次の伊木力小学校における実践においても、また、2年次の長崎大学大学院生たちの実践においても英語音声指導面に確かな成果が表れている。本稿では、これらの実践を背景にして、これまで中学校および高等学校の英語教員を養成してきた英語教員養成担当者の立場から、中学校と高等学校の英語教育を視野に入れながら、日本の小学校における英語教育について考えてみたい。特に、筆者自身の考えかたの根拠ともいえるべき理論的根拠を示し、次いで、小学生のための英語教育は何をすればよいのかということについて考えてみたい。

以下、Ⅰでは、小学生のための英語教育の環境と子供の母国語獲得過程における環境の共通点にふれる。Ⅱでは、Stephen D.Krashen & Tracy D.Terrell, *The Natural Approach*(1983)に基づいて、「言語習得」と「言語学習」の区別を紹介し、小学校における英語教育は「言語習得」を目指すということを述べる。Ⅲでは、「言語習得」におけるインプットの役割を考える。そして、Ⅳでは、これらの議論に基づいて、小学校における英語教育のありかたについて一つの提案をする。最後に、Ⅴでは、伊木力小学校で英語を学んだ卒業生たちの中学校での様子にふれることにする。

Ⅰ. 小学生のための英語教育の環境と子供の母国語獲得過程における環境

1.1. まずはじめに指摘しなければならないことは、小学生に英語を教える場合に、われわれ教師は、英語の文法を説明したり、英語の文字を使って教えたりすることは出来ない

ということである。これは、これまで日本の中学校で中学生一年生にはじめて英語を教える場合と大きく異なる。たとえ、われわれが小学生に英語の文法を説明して理解させようとしても、小学生の場合、論理的思考の発達がまだ未熟であるために、実際には、理解できないというのが現実的な考え方であると言える。それでは、英語の文法や文字に頼らない小学生のための英語教育とは一体どのような英語教育であろうか。子供が母国語を獲得するのは、文法や文字を通してではなく、実際の発話を通してであるということから、ここでは、まず、子供の母国語獲得の過程を考えてみるのがよいであろう。

1.2. 子供が母国語を獲得する過程で、母親や子供の世話をする人は子供にわかるように子供のレベルに合わせ話かけることをわれわれは知っている。それは、彼らが子供とコミュニケーションをすることを意図しているからであるということに注目すべきである。さらに、母親や子供の世話をする人はその言語を話すことができる人であることに注目しなければならない。次に示す「子供がことばを憶える時期の必要条件」は、山口康子氏（長崎大学教育学部教授）がテレビの家庭教育の番組（1996年3月10日 10:45～11:00 NBC再放送）で述べられたものであるが、それらは、子供が母国語をコミュニケーションの手段として獲得するのを手助けすることを明らかに意図していることが伺える。まず、氏は子供がおかれる環境としては、「静かに音を聞くことのできる環境」、そして、「安心して話かけることのできる人がいる環境」が望ましいということを指摘し、子供がことばを憶える時期の必要条件として、次のような項目をあげられた。

1. 子供の精神発達に会うレベルのインプットをする。分からないことばかり聞かせると集中しなくなる。
2. 子供がことばを発するまでには熟してゆく時間があって、熟してから子供はことばを発するので、それまで待つてやる。せかせないこと。
3. 親自身がきれいなことばを使う。
4. 親が聞く姿勢を示す。

これらの子供が母国語（すなわち、第一言語）を獲得する場合の必要条件は、第二言語習得理論（Second Language Acquisition Theory）において指摘されていることとも共通している。Krashen & Terrell(1983: 32)においては、Ⅲで述べるように、分かる状態でインプットをすること（すなわち、Comprehensive Input）の重要性を指摘し、そして、分かる状態でインプットを十分聞かせることによって、話す能力は自然に伸びるようになると指摘している。

また、周囲の人々についての「安心して話かけることができる人がいる」ということ、および、「親が聞く姿勢を示す」ということは、ことばのやりとりのできる環境の重要性を指摘していることになる。子供は周囲の人々とのことばのやりとりを通して、コミュニケーションのスキルを獲得することができるからである。われわれが、日本の英語教育の中で何年間も英語を勉強しているにもかかわらず、英語をコミュニケーションの手段として使えないのは、英語の文法について学習しただけで、このことばのやりとりの練習をしていないからであるということは容易に想像できることである。

子供が脈絡の中で発話されたものを主体的に理解しながら、自らことばを発するようになるという母国語獲得の過程は、小学生のための第二言語（または、外国語）としての英語習得の過程を考えるためのモデルとして利用すべきであろう。言い換えれば、英語の文法に頼らない小学生のための英語教育の場は、子供の母国語獲得過程での環境を参考にし創ることができるということになる。すなわち、それは、英語が使われている環境を創ること、そして、英語でやりとりをしてくれる人がいる環境を創ることが重要な条件となるということである。

もう一度、言い換えれば、小学校における英語教育は、英語をコミュニケーションの手段として使えるように指導する方向で考えられており、したがって、子供が母国語を獲得する場合の過程を参考にすることが出来る。子供が母国語を獲得する場合、子供は、実際に使われている母国語の発話を聞き、脈絡の中で理解し、獲得する。母親や周囲の世話をする人は、その言語の母国語話者として、発話を脈絡の中で使って示すことができる人であり、子供は脈絡の中でその発話を聞き、理解する。それは、使われている発話が子供に理解される状態で示されているからであるということができる。そして、小学生のための英語教育も、このような環境の中で実施されることが望ましいということになる。

II. 「言語習得」と「言語学習」との区別

2.1. ここでは、これまで日本の学校教育のなかで英語教育は主として何をしていたのかを、そして、現在、小学校における英語教育は何をしようとしているのかを、Krashen & Terrell (1983: 26-7) で提示された「習得と学習の仮説」(The Acquisition-Learning Hypothesis) に基づいて検討を加えることにしたい。すでに明らかであるように、前者は「英文法を中心に教える英語教育」、そして、後者は「英文法を教えることのできない英語教育」ということができるが、これらを「習得と学習の仮説」に基づいて説明することができれば、教師自身が、今、自分が何をしているのかを理論的に、または、客観的に把握することができることになり、それは教師にとって、指導目標の設定が明白になることが期待される。

2.2 Krashen & Terrell(1983) で提示された「習得と学習の仮説」は、大人が第二言語の言語能力を伸ばす場合に、習得 (acquisition) と学習 (learning) という二つの異なった方法を用いているというものである。まず、その一つである「言語習得」(language acquisition) については、次のように説明する。

.....The first way is via language acquisition, that is, by using language for real communication. Language acquisition is the “natural” way to develop linguistic ability, and is a subconscious process: children for example are not necessarily aware that they are acquiring language, they are only aware that they are communicating.(Krashen & Terrell 1983: 26)

すなわち、「言語習得」は、実際のコミュニケーションのために言語を使うことによって

言語が獲得されることを意味する。そしてそれが言語能力 (language ability) を伸ばす自然な方法であると考えているのである。たとえば、子供は、母国語を獲得していることを必ずしも意識してはいないが、コミュニケーションをしているということだけは意識しているというように、「言語習得」は意識下の過程 (a subconscious process) であるというものである。第二言語の言語能力を伸ばすもう一つの方法は、「言語学習」 (language learning) を通してであると次のように述べている。

The second way to develop competence in a second language is by language learning. Language learning is “knowing about” language, or “formal knowledge” of a language. While acquisition is subconscious, learning is conscious. Learning refers to “explicit” knowledge of rules, being aware of them and being able to talk about them. This kind of knowledge is quite different from language acquisition, which could be termed “implicit”. (Ibid., p.26)

すなわち、第二言語の言語能力を伸ばすもう一つの方法は、「言語学習」によるというものである。それは、ある言語について知っていること、または、ある言語についての形式的知識 (formal knowledge) を持っていることを通して言語能力を伸ばすというものである。言い換えれば、「学習」 (learning) は意識的 (conscious) である。したがって、学習者は、文法規則についての知識を持っており、文法規則を意識しており、文法規則について説明することが出来る。一方、「習得」については、習得した言語を学習者は使って示すことはできるがその習得した言語について、その文法規則を説明することができることには必ずしもならないということができる。

このような「習得と学習の仮説」に基づいて考えると、小学生のための英語教育は、明らかに、「言語習得」を目指しているということが言える。それは、文法規則を説明することに頼らないで、実際の脈絡の中で英語を使って示すことを通して、英語を教えることを目指しているからである。ちなみに、このような「習得と学習の仮説」の観点から、日本の学校教育の中で行われてきた英語教育を考えると、英語の文法について教えることに終始してきたということから、「言語学習」を通してのみ英語教育を行ってきたということになる。実際の脈絡の中で、どのように英語が使われるのかを示し、コミュニケーションの手段として英語を使えるように指導すること、すなわち、「言語習得」はその視野に入っていなかったということ指摘しなければならないであろう。

このように見てくると、われわれは、Dixson(1975) の「知識」 (knowledge) と「スキル」 (skill) の区別を思い出すであろう。「知識」は、英語の文法規則などを知っていること、そして、「スキル」は、繰り返し練習を行うことによってできた能力を意味する。ピアノを弾くことはスキルである。タイプをするのもスキルである。英語について言えば、英語の文法規則について知っているのは「知識」であり、英語をコミュニケーションの手段として使うのはスキルである。したがって、「言語学習」は「知識」を、「言語習得」は「スキル」を得ることを指していると言うことができる。

2.3. 近年、文部省の学習指導要領で中学校や高等学校、そして、大学の英語教育におい

て、オーラル・コミュニケーションが強調されるようになったのは、これまでの「言語学習」だけによる英語教育では英語教育の一面のみ、すなわち、「英語についての知識を与えること」のみしか達成されておらず、これまでその視野に入っていなかった「言語習得」、すなわち、コミュニケーションの手段として英語を使える能力を習得させることを達成させなければならないことを示していることになるであろう。これをDixon(1975)の用語を用いて言い換えれば、「知識」を重視してきた日本の英語教育に「スキル」を加えることを要求していることになる。どんなに英語についての「知識」を得ても、「知識」を得るだけでは決して「スキル」を習得することにはならない。「スキル」は、繰り返し練習してのみ習得される能力であるからである。

ここで示した「習得と学習の仮説」により、第二言語の言語能力は、「習得」と「学習」の二つの方法を通して伸ばすことができるということを受け入れるとすれば、これまでの日本の英語教育が「学習」、すなわち、「英語についての知識を与えること」だけを通して行われていたことによって、われわれの多くは英語をコミュニケーションの手段として使えるようにならなかったということをはっきりと認識することができるであろう。

次に示す引用文 (Krashen & Terrell 1983 : 26) も、文法中心の言語教育は完全に「学習」(learning)の方向づけがなされており、「習得」(acquisition)は入ってこないということを描している。

If we examine language teaching in grammar-based approaches which emphasize explanation of rules and correction of errors, it appears that teaching is directed totally at learning and not acquisition. In fact, conscious language learning is thought to be helped a great deal by teaching: its goal is the learning of conscious rules, and error correction is thought to help the learner arrive at the “right” form of the rule.

すなわち、文法規則の説明や間違いの訂正を強調する文法中心の言語教育は完全に「学習」の方向づけがなされ、「習得」は視野に入っていないということ、そのような言語学習は、学習者にその目標が意識的な文法規則の学習であるということによって相当地に成果をあげることができると考えられているということ、間違いの訂正は学習者が文法規則の正しい形を学習する助けとなると考えられているということが指摘されている。そして、これは、まさに、日本の英語教育がこれまで行ってきた英語教育の特徴を表しているといつてよい。

しかし、子供の第二言語習得の研究では、このような文法中心の言語教育は言語習得をうながさないと指摘する。たとえば、“I goes to school every day.”と言った学習者がいて、その発話を訂正され、そして、それを正しく繰り返すことを強制されると、3人称単数の規則について頭の中でそれまでの知識を変えることが期待される。つまり、-sが3人称の場合にだけ語尾につくことを認めることができるようになる。しかし、このような教育は「言語習得」の助けにならないということを強調している。間違いの訂正 (error correction) は、特に、言語習得の助けにならないことを指摘している (Krashen & Terrell 1983 : 27)。そして、子供の言語習得を見守る親たちが具体的にどのような指導をしているのかについて、親たちは言語形式についてより、むしろ、子供が言っている内容が正しい

いかどうかを注意していると指摘している。たとえば、'Her curl my hair.' は訂正しないで、'Walt Disney comes on television on *Tuesdays*.' を訂正する。伝える情報が間違っているからである。この場合、実際には、'Walt Disney actually was on television on *Wednesdays*.' であったからである。

以上、「習得」と「学習」について述べ、日本では、「言語学習」を中心とした英語教育を行ってきたこと、そして、小学校では「言語習得」を目指す英語教育を行うということを述べてきた。

Ⅲ. 「言語習得」におけるインプット (Input) の役割

3.1. Iで、子供が母国語 (L1) を獲得する過程での必要条件の一つとして、子供は周囲の人々が話しかけてくれることばを聞くことによって母国語の獲得をはじめめるために、話しかけられることばは子供の精神発達に会うレベルのものであること、すなわち、子供にわかるように話しかけられることが重要であるということを示した。そして、「第二言語としての英語教育」(the Teaching of English as a Second Language) においても、英語を第二言語として使えるように教えるために、わかる状態でインプットをすることの重要性が指摘されているのである。以下、Krashen & Terrell(1983) における「インプット仮説」(The Input Hypothesis) に基づいて、言語を獲得する場合のインプットの役割について考えることにしたい。

3.2. 先ず、「インプット仮説」(The Input Hypothesis) についてその要点を紹介することにしたい。

This hypothesis states simply that we acquire (not learn) language by understanding input that is a little beyond our current level of (acquired) competence. This hypothesis is, in our opinion, of crucial importance since it attempts to answer a question that is important both theoretically and practically: How do we acquire language? (Krashen & Terrell 1983 : 32)

すなわち、「インプット仮説」は、前述の「習得と学習の仮説」により、'acquire' (「獲得する」または「習得する」) ということと、'learn' (学習する) ということとを区別したうえで、われわれが言語を獲得する (acquire) のは、入ってくるインプットを理解することによって実現すると考えるのである。その場合、その入ってくるインプットは、それまでにわれわれが獲得している言語能力、すなわち、「今もっている言語能力」を少し上回るレベルのもので、それを脈絡の助けを借りて理解することによって、われわれは言語を獲得するというものである。

Krashen & Terrell(1983 : 32) では、この「今もっている言語能力」より少し上のインプットをわかるということについて、'i+1' という形式で説明する。すなわち、'i' がすでに獲得して知っていること、'+1' は脈絡で理解できること (しかし、まだ獲得していない) を加えてインプットするということを表しており、学習者は、まだ獲得していない

もの、すなわち、'+1'も、脈絡から推測して自分で理解してゆくことができるということを表している。また、'+1'については、次のような説明が加えられている。

... How can we understand language that contains structures that we have not yet acquired? The answer is through context and extra-linguistic information. Caretakers provide this context for young children by restricting their talk to the "here and now", to what is in the child's domain at the moment. Good second language teachers do this by adding visual aids, by using extra-linguistic context. The input hypothesis thus claims that we use meaning to help us acquire language. (Ibid., p.32)

すなわち、まだ獲得していない構造を含む言語を、われわれはどのようにして理解できるのであろうかという問いに対して、場面や言語外の情報をとおしてであると答えている。たとえば、子供の世話をする人 (caretakers) は、小さい子供たちのために、身近にあるもの、話している場面で子供の領域内にあるものに彼らの話を限定することによって、具体的に「場面」や「脈絡」を与えなければならないということを指摘する。そして、第二言語の優れた教師は、視聴覚教材の助けによって、また、言語外の場面や脈絡を用いることによってこれを行う。言い換えれば、「インプット仮説」は、言語を獲得する助けとなる意味 (meaning) を用いるということを主張するのである。

さらに、「インプット仮説」は、第二言語で話す能力について次のように主張する。

The input hypothesis claims that listening comprehension and reading are of primary importance in the language program, and that the ability to speak (or write) fluently in a second language will come on its own with time. Speaking fluency is thus not "taught" directly, rather, speaking ability "emerges" after the acquirer has built up competence through comprehending input. (Ibid., p.32)

すなわち、「インプット仮説」は、第二言語のプログラムでは、リスニングやリーディングが重要な役割をするということ、そして、第二言語で話したり、書いたりする能力は、インプットを理解しながら、リスニングやリーディングを繰り返し続けるうちに、時間とともに獲得され、話したり、書いたりすることができるようになるということを主張する。したがって、聴解力 (listening comprehension) と読解力 (reading comprehension) の訓練が言語学習プログラムで第一義的 (primary) に重要であるということを主張する。流暢に話すことは直接的には教えられない。むしろ、話す能力は、学習者がインプットを理解することを通して言語能力を獲得すれば表面に出てくるものであるというのである。この考え方は前述の子供が母国語を獲得する場合について山口康子氏が「熟する時間が必要であるから話すのをせかせわずに待つように」と指摘されたことに対応することになる。

小学生が英語をことばとして獲得できるように教えるために、「インプット仮説」はわれわれにいくつかの有益なヒントを提供しているように思われる。その最も重要なものは、身近なものを表す英語の単語や構文 (パターン) を繰り返し聴かせること、そして、その場合、わかる状態でインプットすること、そのために、教師には、わかる状態でインプット

するための場面や脈絡づくりにいろいろな努力と工夫が要求されるということなどである。

Ⅳ. 小学校における英語教育のありかた

4.1. 小学校の英語教育は「言語習得」を目指すということをすでに述べた。そして、「言語習得」というのは、習得した言語を使って示すことができるが、習得した言語についてその文法規則を意識してはならず、説明することができないことを意味するということ述べた。一方、「言語学習」というのは、文法規則についての知識を持っており、文法規則を意識しており、文法規則について説明することができるが、学習した言語を使って示すことができないことを意味するということ述べた。後者については、われわれは日本の英語教育の中ですでに体験して知っているけれども、前者については、われわれは体験していないと言ってよいであろう。日本の中学生、高校生そして大学生にとっての理想的な英語学習法としては、「言語習得」と「言語学習」の両方を通して英語を学習することが望ましいということになる。つまり、「言語習得」を通して獲得し、使えるようになった英語を、「言語学習」を通して得た英文法の知識を用いて、間違っているのかどうかを学習者自身でモニターできることが望ましいことになる。ただし、krashen & Terrell(1983: 44) が指摘しているように、モニターの使い過ぎは、コミュニケーションを妨げることになるため、程よく使うことができるのが望ましいということをつけ加えておきたい。さらに、中学生、高校生、および、いわゆる大人の学習者にとって、「言語学習」の役割は大きいということ指摘しておきたい。もし文法知識がなければ、自分の発話や文章が文法的に正しいかどうかをモニターできないことになり、この場合、間違いを自分で訂正することができないことになるからである。

4.2. 小学生の場合に話を戻すことにしよう。小学生が英語教育を受ける場合、「言語習得」を目指すということ述べたが、この場合、小学生は英文法規則についての知識を持たないために自分で間違いに気がつくこともできないことになる。すなわち、モニターを使うことができないことになる。したがって、小学校で英語を教える場合、教師は正しいモデルを示すことがまず第一に要求される重要な仕事であることになる。すなわち、正しい発音、正しいイントネーション、正しいリズムで、語や語句や構文(パターン)を脈絡の中で学習者にわかる状態で示すことが教師の重要な仕事となるのである。Iで、子供の母国語獲得過程における必要条件の一つに、「親自身がきれいなことばを使う」と指摘されていることを述べたが、これは、英語教師が小学生にモデルとしてそのまま習得することのできる正しいインプットを提供しなければならないことを意味することになる。小学生は、自分で訂正することができない状況におかれているからである。したがって、英語を第二言語として(また、外国語として)習得する日本の小学生にとって望ましい環境とは、与えられたモデルをそのまま習得すれば、正しい、きれいな英語を習得していた、という環境であることになる。このような観点から、日本の小学生のための英語教育は何をしなければならぬのかということについて提言をするとすれば、次の2点をあげるができるであろう。

1. 教材は、身近なものを表す語、語句、構文（パタン）を選ぶ。
2. 音声中心の指導をする。ただし、その場合、次の2点に留意すること。
 - ア. 場面や脈絡を与えて、意味のある環境で教材を示す。
 - イ. 正しい発音、リズム、イントネーションを示す。

小学校における英語教育において、小学生が身近なものを表す英語の単語、語句、そして、構文（パタン）を、場面や脈絡の中で音声を通して与えられ、一つ一つの単語、語句、構文（パタン）を意味のあるものとして習得しているうちに、英語の音体系を自然に獲得することができれば、小学校における英語教育は、それぞれの児童のその後の英語学習に明らかに有利なものとなることは容易に予測できることである。たとえ中学校や高校における英語の授業が「言語学習」中心になり、「言語習得」がおろそかになったとしても、小学校において、すでに、「言語習得」を中心とした授業を通して英語の音体系および英語をことばとして学習する方法を獲得していることになるからである。Vでふれるように、彼らにとって、すでに英語は単なる学科目ではなく、コミュニケーションの手段として使うことのできることばとしてとらえられていることが期待できるからである。「言語習得」を目指す授業は成果を示すことができるまでに教師にとってもまた学習者にとってもかなりの努力と忍耐を必要とする。それは、長い間、繰り返し練習をすることを要求するからである。したがって、小学校において、前述のような音声中心の英語教育がなされていれば、中学校、高校における英語教育がこれまで十分に指導できなかった面を補って貰えることになり、中学校、高校における英語教育がこれまでより効率よく行われることを予測することは難しいことではないであろう。

4.3. それでは、このような小学生のための英語教育に、英語教員ではない小学校教員はどのように対応すればよいのであろうか。これまでの小学校における研究開発校では、英語指導助手（Assistant English Teacher）の助けを借りたり、また、中学校の英語科教員の助けを借りるなどの方法がとられているが、それでも日本人の、英語教員ではない小学校教員が小学校における英語教育に参加することを余儀なくされているのは事実である。そのような場合に小学校教員はどのような準備または対応をすればよいのであろうか。

伊木力小学校教員との意見交換の場ですでに述べたことであるが、ここでも、次のような考え方を示しておきたい。小学校の教員は英語教員ではないけれども、すでに、中学校、高校、そして、大学で、少なくとも、8年間は英語に接しており、英語についての知識は持っている。言い換えれば、彼らは、「言語学習」を通して、英語を勉強してきている。一方、小学校における英語教育は、前述のとおり、「言語習得」を目指す。したがって、これまで経験していない「言語習得」を小学生たちと一緒に経験する覚悟をしていただきたい。具体的には、授業の前にテープや英語母国語話者のモデルにしたがって発音の練習をしたり、小学生と一緒に教室内で練習することにすればよいのである。小学生たちよりは少し先を歩いている英語学習者のつもりであればよいと思う。

伊木力小学校教員のほとんどは（中学校英語教員免許を持っている二人を除いて）予期しない英語教育にとまどいを感じながら、それでも、小学生たちと一緒に楽しみながら英語教育に取り組んでいる。その姿勢が小学生たちに好影響を与えているのは指摘するまで

もないことである。ここで示した考え方は、少なくとも、伊木力小学校においては有効に活用されているように思われる。

V. おわりに

最後に、伊木力小学校で英語を学んだ卒業生たちの中学校での状況にふれておきたい。伊木力小学校で英語を学習した卒業生たちが中学校へ進学して、他の小学校からの英語を学習していないグループと一緒に英語の授業を受ける場合、伝統的な日本人の英語教員が「言語学習」中心の授業をすれば、彼らの間には、ほとんど相違はないということが、1995年11月10日に行われた伊木力小学校の公開研究授業の折りに、出席した中学校英語教員によって指摘された。これは予想されることであった。一方、1996年9月27日に開催された伊木力小学校における研究開発のための運営指導委員会の際に、1995年9月から英語指導助手として伊木力小学校の英語教育に携わっているカロライン・クラーク (Ms. Caroline Clarke) 氏は、伊木力小学校の卒業生のグループと他校からのグループを中学校の同じ教室で教えているそうであるが、その学習態度は全く異なるということを指摘した。氏は、伊木力小学校の卒業生は積極的に英語の授業に参加するということが、また、小学校で英語の音に馴染んでいるために発音することに対する恥ずかしさ等がなくなっていることを述べ、小学校における英語教育の利点を指摘した。これも予想されることであった。

今後の課題の一つとして、小学校で学習したことを日本人の英語教員が中学校の英語の授業にどのように組み込むことができるのかということがある。これは、中学校の英語教員の英語運用能力の問題と関わってくる。もう一つは、小学校教員の負担の問題である。伊木力小学校では、全校あげて研究開発に取り組んでいるけれども、教員の負担は大きい。長崎大学の大学院生たちの授業実践においても明らかであるが、「英文法を教えることのできない英語教育」、すなわち、「言語習得」を目指す英語指導は教師側の努力、工夫を相当に要求する。小学校における英語教育を長く継続させるためにはゲームなどの教材を十分に準備し、お遊び感覚で、英語に慣れることを目標にして、成果をあせらず、小学生と遊ぶ心づもりが教師に求められるのかもしれない。

参 考 文 献

- Curtain, Helena (1993), "Methods in Elementary School Foreign Language Teaching" in John W. Oller, Jr. (ed.), *Methods That Work*, pp.118-124. Heinle & Heinle.
- Dixon, J. Robert (1975), *Practical Guide to the Teaching of English as a Foreign Language* (New Edition), Regents.
- Krashen, Stephen D. & Terrell, Tracy D. (1983), *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Alemany Press.

参 考 資 料

- 長崎県西彼杵郡多良見町立伊木力小学校
平成7年度 文部省委嘱 小学校における外国語学習に関する研究開発
『研究紀要』(平成7年11月), 『研究開発実施報告書』(平成8年3月)